

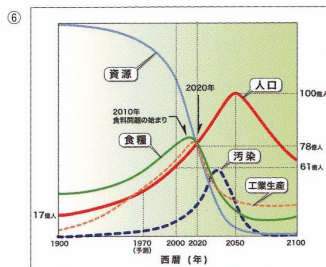
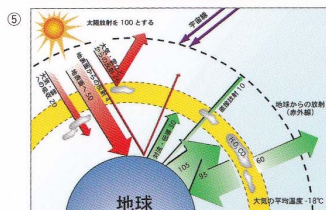
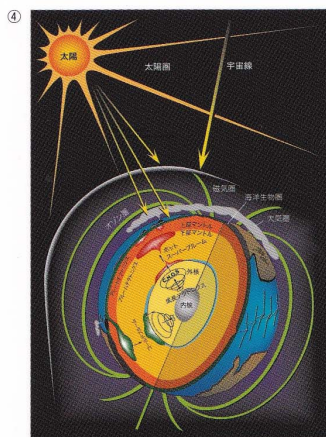
21世紀地球寒冷化と 国際変動予測

丸山茂徳 著
吉田 勝 訳

東信堂

定価：本体 **1,600 円** + 税
21世紀地球寒冷化と国際変動予測

東信堂



温暖化より寒冷化の方が 人類にとってははるかに恐ろしい！

地球の気候に影響を及ぼす全要因に対する総合的考察を欠くいわゆる「温暖化」説は、科学ではなくフィクションにすぎない。今こそこの妄説を排し、すべての変動要因の総合解析がもたらす恐るべき予測・間近に迫った「地球寒冷化」に向け、全人類の英知を結集すべき時だ！

東信堂

★ 新刊 2015 年 4 月発行

定価 本体 1600 円 + 税

販売：各書店、アマゾンなどのほか、下記①か②に直接ご注文頂けます

① 東信堂

Fax: 03-3818-5514

電話：03-3818-5521

E-mail: tk203444@fsinet.or.jp

② ゴンドワナ地質環境研究所

電話/Fax: 0736-36-7789

E-mail:

gondwana@oregano.ocn.ne.jp

主要目次

プロローグ

- 第1章 21世紀の気候予測
- 第2章 押しつけられる 地球 温暖化
- 第3章 二酸化炭素犯人説は間違い
- 第4章 寒冷化はすぐそこまで来ている！
- 第5章 気候変動・地球汚染と 成長の限界
- 第6章 未来に向けて 人類の叡智を！

プロローグ

地球環境は 46 億年の長い地球史を通じてさまざまに変化してきた。気候変動も同様であり、地球史を詳しく解析すること無しに気候変動を予測することは、人の育ちを知らずにその行動を予測するに似てナンセンスである。気候変動はまた、地球システムの一部であり、当然にシステムを構成するさまざまな要素に影響される。短期的なそれらは太陽活動、大気組成、火山活動、宇宙線強度、地磁気強度であり、長期的には海陸分布変化などのいろいろな地質事件も大きな影響を持つ。本書で詳しく説明するように、宇宙線と地磁気は地球の平均気温に決定的に影響する地球を覆う雲量に影響する重要な気候支配要素である。さらに、太陽活動も含め、これらの要素はお互いに干渉し合い、強弱に変化する。気候変動の研究には、これらの諸要素を総合的に解析せねばならない。このような総合的な見地無しに気候変動を語るのは、病人を体温データだけで診断するようなものである。地球温暖化とその二酸化炭素原因説を強調する IPCC（気候変動に関する政府間パネル）報告は、まさに上記の総合的な見地を欠いおり、世界を誤った方向に導いているのである。

本書は、このような地球システムを構成するすべての要素の変動のメカニズムと相互の干渉作用についての最新の研究成果を踏まえ、21 世紀の地球は温暖化でなく寒冷化であるという予測を示す。そして今人類は地球温暖化の危機ではなく、人口爆発と資源涸渇の危機に直面しており、その危機はまた、寒冷化の到来によって一層深刻なものになるのである。人類は今、二酸化炭素削減の努力でなく、地球寒冷化に備え、人口縮小と新エネルギー開発に向けて国際協力を開始すべき時であることを強調する。

<目次>

第 1 章 21 世紀の気候予測

太陽、宇宙船、雲、地球の平均気温の因果関係

過去 1000 年間、現在と未来の太陽活動

宇宙線の変化

最近の地球の平均気温変化

最近数年間の異常気象は寒冷化の予兆

第 2 章 押し付けられる地球温暖化

IPCC 報告と「不都合な真実」

地球を受け売りする日本の環境省

二酸化炭素犯人説はどこから来たか

IPCC 報告と自然のかい離

自然界の緩衝作用を軽視する IPCC

IPCC の意図的データ操作

スーパーコンピューターの妄信は自然の無視

科学と政治の結びつきの結果は？

温暖化か寒冷化か？－決着は 10 年以内

京都議定書で苦しむ日本

第 3 章 二酸化炭素犯人説は間違い

二酸化炭素増加と地球温暖化はどちらが先か？

太陽が地球温暖化の主犯か？

太陽エネルギー強度に大きく影響するミランコビッチサイクル

気候変動に及ぼす宇宙線、地磁気と火山活動の効果

暗い太陽のパラドックス

最新研究が明らかにする地球の周期的変動と気候変動

疑問や反論を口に出せない日本の科学者たち

刷り込まれる「二酸化炭素犯人説」

温暖化危機と二酸化炭素犯人説を煽るマスコミの責任

第 4 章 寒冷化はすぐそこまで来ている！

現在は氷河時代の中の短い間氷期か

地球寒冷化が生物大絶滅をもたらす

人類・生物界が繁栄してきたのは地球温暖化時代

地球寒冷化による民族大移動の歴史

地球環境変化は生物進化に影響

寒冷化によるダメージ軽減の準備

第5章 気候変動・地球汚染と成長の限界
地球システムの全体像－分野横断型共同
研究プロジェクトの成果
気候変動研究には多分野の有機的な協力が
必須
ヒートアイランド現象とその対策
恐ろしい水と空気の汚染
「成長の限界」－人口爆発と資源枯渇の
危機

第6章 未来に向けて人類の叡智を！
日本の貧しい哲学と科学
戦略に乏しい日本
寒冷化と人口爆発が飢饉と戦争の危機を
呼ぶ
石油節減と新エネルギー開発への努力

科学の進歩と人類の未来
地球の進化史と人類の進歩
人口爆発が最大の環境問題
人口縮小プログラムを緊急に！

エピローグ

引用文献(抄)

図の転載許可への謝辞

訳者あとがき

索引

訳者あとがき(抄)

気候変動に関する政府間パネル（IPCC）が、その報告（2001，2007）の中で地球温暖化と、その原因としての大気中炭酸ガスへの対策の必要性を世界に訴えて以来、炭酸ガス削減への努力が世界の潮流になっています。

しかし、2001年の当初から、IPCC報告の描く地球温暖化やその主張する炭酸ガス犯人説は、少なくない科学者が疑問視していました。たとえば日本では、地球科学者の90%がそうであったと指摘されています（丸山，2008a）。残念ながら、IPCCの強力な政治力に対してそのような意見を実際に表明する科学者は少数で、とりわけ日本ではメディアや関連省庁に全く無視されていました。しかし2009年11月以降に、IPCC報告書のとりまとめ責任者らの恣意的なデータ操作や報告作成態度が次々と明らかになってからは、科学者らはもとより、公的機関からもIPCCの責任追及の声があがりました。

丸山茂徳氏は2008年に本書の前身である「地球温暖化論に騙されるな！」を著し、IPCC報告の21世紀気候予測が、雲量の変化や、それに強く影響する宇宙線強度その他重要な気温変動支配要素を考慮に入っていないこと、さらには地球史の長い過去の気候変動記録を殆ど無視していることから誤った結論を出していると看破した。そして地球の歴史に学び、地質学、古気候学、宇宙物理学、天文学等の分野に関わるすべての気候変動支配要素を総合的に解析すべく、多分野横断型の共同研究プロジェクトを実施し、その結果、21世紀の地球は温暖化ではなく寒冷化に向かうことを明確に示しました。

本書は上記の「地球温暖化論に騙されるな！」を、著者と相談しつつ大幅に改定した英語版「Approaching Crisis of Global Cooling and the Limits to Growth – Global Warming is not Our Future」（吉田勝・V. スペンサー訳，2011）を、著者の示唆を受けて日本語に逆翻訳したものです。